

令和5年度 自己評価表

鳥取県立米子養護学校

【中長期目標(学校ビジョン)】

一人一人の能力を最大限に伸ばし、自立と社会参加に向けて、より豊かに生きる児童生徒を育成する。

※ キーワード 【コミュカアップ(コミュニケーションカアップ)】 めざせ！あいさつ日本一！！

【今年度の重点目標】

- | | |
|------------------------|------------------|
| ○学ぶ意欲と自己肯定感を高める教育活動の展開 | ○安全で安心な学校づくり |
| ○お互い認め合い、高め合う教職員集団の実現 | ○表現力及び体力の向上,健康増進 |
| ○家庭・地域との連携強化 | ○業務改善の推進と組織の活性化 |

様式 2

| 年 度 当 初 | | | | | 評 価 結 果 (2) 月 | | | |
|---------|---------------|--|---|---|---|--|------|---|
| 評価項目 | 評価の具体項目 | 現状 | 目標(年度末の目指す姿) | 目標達成のための方策 | 経過・達成状況 | 評価 | 改善方策 | |
| 小学部 | 主体的な学びを促す取り組み | ○児童が意欲的・主体的に取り組みながら、生活に汎化する力を培うための指導・支援の工夫 | ○自分なりの方法で、学びを重ねてできることを増やそうとしている児童が多いが、経験不足や画一的な方法にとらわれがちになり、失敗を恐れたり自信が持てなかったりして生活に応用するまでの力がついていない児童もいる。 ○決められたルーティンの中では活動できるが、イレギュラーな場面では主体的な行動がとれないことがある。 ○思いを表現する方法や人・場面は限定されがちである。 | ○成功経験や達成感を高める学習を繰り返す中で、児童が自信をもって生活に汎化できた場面が、2カ所以上ある。 | ○生活の中で汎化すればより豊かになる力は何かを明確にするため、保護者との連携を取ったり学習の組み立てについて教職員間で共有したりして指導・支援する。家庭や学校でできたことを共有する中で、2カ所以上の具体的場面があるかどうか、定期的な確認を行う。 | ○学年団を中心とした教員間で児童の実態やねらい、支援について共有化を心がけた。教職員アンケートでは、児童が自信を持てるような学習の工夫を心がけたと答えた教員が97.5%であり、達成感が持てるような学習を意識して行えた。また、生活場面での汎化を実際に2カ所以上実感できた担任は80%、担任とのねらいの共有や家庭生活を意識したねらいの共有ができたと答えた級外教員は95%であり、日々の学習を行う中で学校生活だけでなく家庭生活にも視野を広げたいねらいについて意識した教員が多いといえる。日々のやり取りの中で家庭生活でもできる場を担任に伝える保護者もいた。 | A | ○保護者とさらに連携がとれる方法や伝え方等について模索し、児童の生活力を高めるための方法について検討する。 ○日常の困った場面だけではなく、挑戦したいという気持ちを育てながら、自信や応用力を高めるための授業について、研修を深め実践をする。 |
| | | ○人に伝えたいという意欲を高め、伝わるコミュニケーション力の向上を目指す | | ○児童が自分から人に伝えたり、自分の思いを表現する場面が増えたりしたと感じる教職員が8割を超えている。 | ○画一的なやり方にとらわれないよう、いろいろな方法(ICT機器や絵カード等)を準備したり、柔軟に対応したりする。また、タイムリーに称賛したり言語化して伝えたりする場面を意図的に設定する。実感として変容を感じられるよう、学期ごとの教職員アンケートをとる。 | ○教職員アンケートでは、児童が自分から人に伝えたり、自分の思いを表現する場面が増えたりしたと感じるかという質問に、「かなりできた・できた」と100%全員が達成を評価した。児童の普段のあいさつの仕方が変わった、カードを使った意思表示ができる場面が増えた、YES・NOや選択できる場面が増えた、共感した教師の問いかけにうなずく等で表現できた等、ねらいたいことが成果として、実態に現れたと実感できた。 | A | ○児童のしたい、伝えたいという思いを育てるためには、児童にとって楽しい授業はもちろん、教師自身も楽しんで授業を行うことが大切である。また、実態把握の仕方、適切な課題設定、魅力ある授業展開等のつながりある授業づくりについて、専門的な知識を深めながら、実践的な研究を進めていきたい。 |
| 中学部 | | ○コミュニケーション力、表現力の育成 | ○生徒同士で関わりあうのが好きな生徒がいるが、声が大きくなりすぎたり、相手を不快にさせたりする場合もある。 ○生徒同士で関わりたい気持ちがある生徒がいる。声を掛けられるのを待っていたり大人を介してのコミュニケーションだったりする生徒もいる。 | ○生徒が自分の思いを伝える力が向上したと感じる教職員が8割を超えている。 | ○表現力に着目した授業構成や指導・支援の方法を工夫し、授業改善に取り組む。 ○様々な方法で自分の思いが伝えられる場を工夫する。 ○生徒個人ごとに自分の思いが伝えられたと評価できる場面を想定しておく。 | ○生徒が自分の思いを伝えやすい場を工夫したり、個に応じて思いを伝えるための支援をしたりした。生徒が自分の思いを伝える力が向上したと感じる教職員は78%であった。 | B | ○自分の思いを伝える場面を設定し、繰り返し取り組んでいく。 ○写真やイラスト、カードなど自分の思いを表現できる場面を作り、できたら称賛していく。 |
| | | ○魅力ある授業づくり | ○言葉でのコミュニケーションが難しい生徒がいる。 ○意欲的に学校生活や学習活動を送っている生徒がいるが、登校渋りがあったり欠席が増えたりする生徒もいる。 | ○単元末のアンケートで8割の生徒が授業が「分かった、できた」と回答する。 | ○授業作り研修等を活用して、生徒自身が考え、選択し、判断、表現できる、魅力ある学習活動をめざす。 ○様々な体験活動を通して生徒たちに達成感や成就感を味わわせ自己肯定感を高める。 | ○生徒たちが自分たちで調べたり、体験したり、試行錯誤したりする学習場面をつくり、魅力があり分かる授業作りを心掛けた。単元末のアンケートでは、「分かった、できた」と回答した生徒は75%だった。 | B | ○授業づくり研修で学んだことを活かしてさらに魅力ある学習活動をめざしていく。 ○今後も体験活動を設定し、生徒自身が考えたり、判断、表現したりできるよう努める。 |
| 高等部 | | ○自ら考え、物事に主体的に取り組み、目標に向かって努力する生徒の育成 | ○何事にもまじめに取り組もうとするが、指示を待つ傾向が強く、自分で考えて行動することが苦手だったり、深く考えずに短絡的に行動したりしがちな生徒が多い。 ○様々な実態の生徒が多く在籍している。人との関わり方に課題があったり、一緒に何かをやりとげた経験が少なかったりする生徒が多い。 ○受け身がちでしてもらうことに慣れていく生徒が多く、自分から進んで行動したり、積極的に動こうとしたりする生徒が少ない。 | ○学校生活の中で、生徒が考える時間や自分から取り組む場面が増えたと感じる教職員が8割を超えている。 | ○生徒が自分で動ける環境を整える。 ○学ぶ楽しさを実感できる、わかる授業づくりをする。 ○教科の特性に応じた「見方・考え方」を意識した授業づくりを研究部と協力してすすめる。 ○生徒理解のための学部研修の充実を図る。 ○生徒が自分の努力を実感できるよう、授業の中に必ず具体的な目標提示と評価の場面を設定する。 | ○単一生徒アンケートで自分でしっかり考えて行動したかという問いに対し88%、活動に進んで取り組んだかという問いに対し91%の生徒ができた、だいたいできたと答えた。また、教員のアンケートでは十分達成、概ね達成と評価した教職員が95%だった。「やらされている」ではなく、生徒がすすんで動こうとする姿が増えている。 | A | 今後も継続して以下のような指導をすすめていく ・学習や活動、集会、行事等生徒が考えたり運営したりする機会を増やす ・声かけの内容の精選をする、教員が先回りするのではなく見守る、自分で判断する機会を増やす ・失敗する経験から生徒自身が学ぶ機会を持つ ・生徒が思いを伝える力をつける ・家庭との連携、情報共有 |
| | | ○自立に向けた力を身につけ、周囲の人と共に豊かに生きていく生徒の育成 | | ○様々な人と関わりながら、自分の役割に責任を持って活動に取り組んでいる。(生徒のチェック表、教職員のアンケートでどちらも達成率が8割を超えている) | ○表現活動や作業学習など、様々な場面で人と関わりながら自分の役割をはたし、協力する活動を充実させる。 ○地域資源や外部講師を積極的に活用し、様々な人と関わる機会を設定する。 ○自身の役割に責任を持って取り組めるよう、係活動や委員会活動など、日々の当番活動を充実させ、生徒が自分で振り返られるようチェック表を用意する。 ○学部の中で段階に応じた「役割」や「責任」について共通理解する場を設ける。 | ○単一生徒アンケートで係や委員会の仕事を忘れずにできたかという問いに対し85%、作業や表現活動などで自分の役割に責任を持って取り組んだかという問いに対し91%の生徒ができた、だいたいできたと答えた。また、教員のアンケートでは十分達成、概ね達成と評価した教員が95%だった。アンケート結果としては高い評価であったが、当番等きめられた仕事を忘れずにできたという内容が多かった。求める姿として、人との関わりの中で役割をはたしていくという意識を育てたい。 | B | より人との関わりの中で、自分の役割を意識していけるよう、今までの指導の継続に加え以下の指導をすすめていく ・責任を果たしたり、やり切った時の価値づけをする ・校外内の様々な人と関わる場面をつくる ・主体的に取り組む機会を多く持つ ・様々な場面で個人の力だけでなく、チームでつくりあげているということを伝えていく |
| 全体 | 業務改善の推進と効率化 | ○時間外業務の削減 | ○時間外業務の削減の意識が高まり、時間の使い方を工夫する教職員も見られたが、月45時間を超える職員もおり、継続して取り組む必要がある。 ○昨年度より、グループ会議の議題の精選、提案事項の明確化等による時間短縮に取り組んでいる。教職員の8割は「意識できている」「少し意識できている」と回答しており更に意識を高める必要がある。 | ○自ら業務改善策を考え、取り組むことができた。(9割以上) | ○自分でできる業務改善の方法を考える。 ○モデルとなる仕事を紹介する。 ○申請書(仕事内容・優先順位・退勤時間)を事前に提出し、自分の働き方を見直す場とする。 ○グループ会議の議題の精選、提案事項の明確化等による時間短縮を図り、個人の仕事の時間を確保する。 ○学級事務の日、ライトダウン日を設定し、計画的に勤務をする環境を整える。 | ○自分の働き方を見直すアンケートを実施し、自ら業務改善策を考えた。 ○作成の時間が負担感となり、申請書の活用が浸透しなかった。 ○毎月の時間外業務の多い教職員と面談を行い、働き方を見直すきっかけ作りとなった。 | B | ○意識改革のためのアンケートを実施する。 ○紙による申請ではなく、ホワイトボードを使った簡易な方法にしていく。 ○学校電話の留守電の切り替え時刻やライトダウンについて衛生委員会で検討する。 |

評価基準 A: 十分達成 B: 概ね達成 C: 変化の兆し D: まだ不十分 E: 目標・方策の見直し

[100%] [80%程度] [60%程度] [40%程度] [30%以下]

| 年 度 当 初 | | | | | 評 価 結 果 (2) 月 | | | |
|---------|------------------------|---|--|--|--|---|--|---|
| 評価項目 | 評価の具体項目 | 現状 | 目標(年度末の目指す姿) | 目標達成のための方策 | 経過・達成状況 | 改善方策 | | |
| 教務部 | 年間指導計画の整理 と教材データの整理 | ○学習指導要領に基づいた学習内容の見直し | ○昨年度、これまで取り組んできた授業を学習指導要領の目標と内容で整理し、指導の形態ごとの年間指導計画を作成することができた。さらに教科のまとまりを意識し、内容を見直していく必要がある。 | ○学習指導要領に基づいた教科ごとの年間指導計画を作成し、内容の漏れや偏りを把握して、内容の見直しにつなげる。 | ○学習指導要領の各教科を意識できるよう、教科領域の会ごとに教科を割り振って作業を進める。 | ○教科領域の会ごとに教科を割り振り、内容の漏れや偏りがなくチェックを行った。内容はほぼ網羅できており、足りない部分について年間指導計画の修正を行った。 | B | ○各教科等を合わせた指導の取り扱う教科等の内容は、今後整理をしていく必要がある。来年度個別の指導計画の様式を変更するため、個別の指導計画と年間指導計画とのつながりを検討していく。 |
| | | ○校内サーバー、ICT機器、サイト等の管理の改善 | ○校内サーバーに不要と思われるデータが多くある上に、日に日にデータ容量が多くなり運用上差支えが出てきている。 | ○校内サーバーやICT機器などの運用方法について共通理解が図られて運用されている。 | ○動画や写真、音楽データ、パワーポイントなどの圧縮の方法を情報提供し、データ容量や共有サーバーについての理解と意識を高める。データの保存方法についての決まりを提示する。 | ○動画や写真、音楽データ、パワーポイントなどの圧縮の方法のマニュアルを作成し、データ容量や共有サーバーについての情報発信を行い、データの保存方法や保存の場所についての決まりを提示した。 | B | ○日に日に増えるデータを圧縮するなどの改善が見られる。共有サーバー内の教材など、データの整理について定期的によりよい運用方法について情報提供や呼びかけを行い効率的な運用管理に取り組んでいく。 |
| 研究部 | 学校全体で取り組む 校内研究 | ○一貫性のある校内研究の推進 | ○例年、各学部ごとに授業づくり研修を進めており、授業研究会も学部ごとに行なっている。教員が他学部の授業を見る機会がない。 ○今年度から新しいテーマでの校内研究がスタートする。 | ○年間1回以上、全教職員が担当グループ以外の授業を見て、8割以上の教職員が授業づくりの参考にしている。 | ○担当グループ以外の授業を見に行ける研究計画をすすめる。 ○研究テーマに沿った、共通したツールを用いて授業研究を進める。 | ○全職員で共通の授業づくりシートと、動画、プレゼンテーションを活用したポスターセッション(実践報告会)を実施した。担当グループ、学部を越えたそれぞれの授業づくりの取組を共有することができた。事後アンケートでそれぞれの取組が99%の教職員が参考になったと回答した。(とても参考になった32、参考になった58/91人回答)参考になった事例を自身の実践にどう生かしていくかについては学校全体では取り組めていない。 | B | ○共有した他グループ、他学部の取組を自身の授業改善にどのようにつなげていくか、方策を明らかにして計画的に研究を進めていく。 ○外部講師を活用したり、他学部の取組を周知する機会を設定したりして、計画的に研究をすすめる、授業改善につなげていく。 |
| | | 健康教育の充実と 危機管理意識の向上 | ○健康課題(肥満・歯周病など)に対する指導・支援の充実 | ○学年が上がるにつれて中等度肥満、歯周病の児童生徒が多い。 ○組織的、継続的な取り組みが必要である。 | ○昨年度の歯科検診結果による歯垢の付着・歯肉炎の割合が5%減っている。 | ○家庭での様子を知るための実態把握生活アンケートを実施 ○歯と口の健康づくり事業の推進 ○ホームページやたよりを活用した啓発 ○各学部や分掌と連携し、職員への研修や指導支援の充実を図る | ○歯と口の健康づくりについて、各教科領域・分掌でできることを検討し、学校全体で取り組むことができた。その結果、6月と12月の歯科健診結果を比較すると歯垢の付着・歯肉炎の割合が5%減った。 ○生活習慣アンケートを実施し、児童生徒の健康課題や家庭での様子を把握することができた。 | A |
| 保健安全部 | 危機管理意識の向上 | ○防災・防犯(火災、地震、不審者等)に関する危機管理意識向上 | ○いっどこでおきるかわからない災害に対して、教職員一人一人が危機管理意識を高く持ち、防災体制の整備及び充実を図る必要がある。 | ○防災に対する危機管理意識が高まっている。(80%以上) | ○定期的に校内情報共有サイトで呼びかけを行い周知を図る。 ○計画的に研修会・訓練等を行う。 ○外部の専門家(消防署、警察署等)の助言を生かした防災等のマニュアルの見直し | ○外部専門家による研修会・訓練や発生時刻や場所を知らせない訓練を行った。研修・訓練後、危機管理意識が高まっていると感じた職員は95%以上であった。 | A | ○今後も外部専門家による研修・訓練を計画的に行っていく。 ○意識は高まっているが、職員一人一人が自分の役割について考え、行動できるよう様々な場面を想定した研修や訓練を計画する。 |
| | | 組織的・継続的な対応 | ○生徒指導上の諸問題への迅速かつ適切で組織的、継続的な対応 | ○昨年度は問題行動等の発生時には迅速に生徒指導委員会・不登校対策委員会を実施し、各事案に対して適切に対応を行ってきた。本年度、部員が刷新されたので、改めて報告・連絡・相談・確認を徹底することを意識し、昨年度同様に情報共有に努める必要がある。 | ○生徒指導委員会や不登校対策委員会等で学部間の情報共有をし、大きな問題にならないよう迅速な対応ができていく。 | ○報告、連絡、相談、確認を徹底することと、各委員会の情報共有はしっかりと行い議論する内容をできるだけ絞り、必要があれば関係機関と連携し、迅速かつ適切な対応に努める。 | ○委員会を通して各事案の情報を共有し、適切に対応に努めることができた。いじめ対策委員会では、進め方を見直し、事案解決に向けての進め方が明確になるよう努めたが、実際に進めると、迷うことや今後見直しが必要と感じた。 | B |
| 生徒指導部 | 組織的・継続的な対応 | ○生徒指導上の諸問題への迅速かつ適切で組織的、継続的な対応 | ○昨年度は問題行動等の発生時には迅速に生徒指導委員会・不登校対策委員会を実施し、各事案に対して適切に対応を行ってきた。本年度、部員が刷新されたので、改めて報告・連絡・相談・確認を徹底することを意識し、昨年度同様に情報共有に努める必要がある。 | ○中学部単一3年生、高等部単一1年生全員の個人面談を実施して生徒の実態把握に努め、早期に諸問題を発見し指導や支援に生かしている。 | ○SCによる中学部3年生、高等部1年生全員の個人面談を実施する。実施後、実施した生徒の様子を継続して見守り、指導や支援に生かしたり、引き続きカウンセリングを行ったりしていく。 | ○100%の生徒の面談を実施した。またカウンセリングの必要な生徒への面談も継続して行うことができた。その他、教師と話をする機会を設定し、諸問題への未然防止、早期発見、対応に努めることができた。 | A | ○中学部単一3年生、高等部単一1年生全員の個人面談を継続して実施する。面談を継続して行う必要のある生徒に対しては、計画的に面談を実施する。 |
| | | 人権教育 | ○年間指導計画の改訂 | ○各教科等に示されている目標と人権教育とのかかわりがわかりづらい。 ○各教科等の年間指導計画が一新されたことに伴い、人権教育の見直しが必要となった。 | ○児童生徒の生活段階を踏まえ、育てたい資質・能力を見据えた系統的な計画となっている。 | ○各教科等に示されている指導の目標を受け、人権教育とのかかわりを明らかにしていく。 ○教務部や各学部の教科等の担当者と連携しながら、使いやすいものを考える。 | ○現行の各教科領域の年計の人権にかかわる内容から、児童生徒につけたい資質・能力に該当するものを検討し、21の内容が網羅されるように人権教育年間指導計画を改訂した。 | B |
| 進路指導部 | 家庭・地域との 連携強化 | ○児童生徒、保護者の進路希望の把握 ○児童生徒、保護者のニーズにあった進路情報の提供 | ○児童生徒や保護者が、各学部卒業後や将来の進路についてどのような選択肢があるのかを知り、主体的に考える機会を十分に提供できていない。 ○進路説明会等へ参加できない保護者への情報提供の仕方や、保護者の関心を高めるために工夫が必要である。 | ○児童生徒の将来の生活イメージを教職員と保護者が共有し、進路指導にあたっている。 | ○教育支援計画アンケート、進路希望調査、個人懇談等を活用する。 ○個人懇談、福祉セミナー、就労促進セミナー、しんろだよりなどを通して進路について情報提供をする。 ○各学部の保護者向け進路懇談会の開催形態、内容等を工夫する。 ○各学部で職員研修を実施する。 ○目標に対しての評価アンケートを実施する。(教職員、保護者) | ○教職員アンケートでは約8割が「本人、保護者と将来をイメージを共有できている」と回答。懇談や中高進路希望調査を機会に生徒自身が進路について考えたり、保護者と思いを共有したりすることができている。 ○保護者の約8割が「必要とする進路情報が提供されている」と感じている。一方、「進路担当だけでなく、担任も情報を持ち、懇談等で提供してほしい」との声もあった。 | B | ○個人懇談等で、本人保護者のニーズや各学部にタイムリーに必要な情報提供ができるように、担任への助言や情報提供を行ったり、職員研修を実施したりする。 |

評価基準 A: 十分達成 B: 概ね達成 C: 変化の兆し D: まだ不十分 E: 目標・方策の見直し
[100%] [80%程度] [60%程度] [40%程度] [30%以下]

| 年 度 当 初 | | | | 評 価 結 果 (2) 月 | | | |
|----------|-------------|----------------------------------|---|---|---|--|--|
| 評価項目 | 評価の具体項目 | 現状 | 目標(年度末の目指す姿) | 目標達成のための方策 | 経過・達成状況 | 改善方策 | |
| 教育支援部 | 校内外の教育支援の充実 | ○校内資源を活用した校外支援体制づくり | ○地域の小・中学校からの教育相談は増えつつあるが、保育園・幼稚園や高等学校からの依頼は少ない。 ○小・中学校、高等学校等の教員に対する研修協力機能については周知が不十分である。 | ○保育園・幼稚園や高等学校からの教育相談が、研修依頼も含め、昨年度と比べ1.5倍増えている。 | ○他機関と連携し、挨拶周りをすることで顔が見える関係づくりに努める。 ○教育相談をきっかけとし、こちらからニーズに応じた職員研修の提案を行う。 | ○園を訪問し、園児の実態把握を丁寧に行い、一人一人の実態に応じた助言や参考資料の提供を行った。チラシを活用した宣伝効果により、教育相談や研修依頼が昨年度と比べ3倍以上増えた。 ○高等学校への訪問をきっかけとして個別の教育相談へつながるケースが増えた。 | ○今後も継続して、丁寧な実態把握や適切な助言等を行ったり、ニーズに応じた研修を計画したりしていく。 ○積極的に校外へ出かけセンター的機能の活用について周知を図ると共に相談しやすい関係作りに努める。 |
| | | ○支援についての困り感軽減に向けた情報提供と校内支援の体制づくり | ○担当する児童・生徒のかかわりについて教員が個々に困り感を抱えている。 ○支援についての専門性を高めたいと思っている教職員の割合は高い。 | ○校内支援を利用した教員の8割が利用したことについて肯定的な評価をしている。 ○困り感に対する支援の情報提供や校内の取り組みの工夫を発信している。 | ○年度初めに困り感のアンケート、年度末に校内支援の評価アンケートをとる。 ○記録など客観的データから支援の有効性を評価し、成果を見える化する。 ○事例検討会など各学部で取り組んでいる支援の工夫の具体例を収集し紹介する。 | ○1月の校内支援評価アンケートでは、校内支援利用教員全員が利用したことについて肯定的な評価だった。 ○支援方法や校内の事例について、研修や校内情報サイトで発信に努めた。問題行動の記録をグラフ化し、実態や成果を見える化することによってチームで情報共有することができた。 | ○今後も児童生徒を丁寧に観察し、校内の専門性の高い教員と連携しながら助言を行う。 ○校内の事例や支援部の介入事例、支援についての情報等の発信を継続する。 |
| 体力づくり推進部 | 体力の向上 | ○けんべい体力作り推進計画に基づいた体力づくり | ○けんべい体力作り推進計画の研修を行ってきているが共有が不十分であり、実際の授業や体力づくりに生かされていない。 | ○推進計画の身体的要素を参考にした授業や体力づくりに取り組んでいる。(各学部、単一障がい、重複障がいごとの「身体的要素と活動の関連表」ができています) | ○学部ごとに実際に行っている授業や活動が、推進計画のどの身体的要素と結びついているか見直し、改善する時間を持つ。 | ○「身体的要素と活動の関連表」「体力づくり推進計画」を各学部の実態やスポーツテストの項目等に応じたものに改善することができた。 | ○「身体的要素と活動の関連表」「体力づくり推進計画」を参考にした体力づくりに取り組んでいる実践例を紹介していく。 |
| | | ○新しい体育的行事作りと、余暇の拡充や生涯スポーツ活動の啓発 | ○児童・生徒、保護者が一堂に会し運動を楽しむ機会としての体育的行事が開催できていない。また、学校以外で運動に親しむ児童・生徒が少なく、肥満傾向を示す者が多い。 | ○児童生徒による実行委員会が立ち上がり、交流種目や親子種目が考えられている。 ○障がい者スポーツ大会、湖山池マラソンに参加する児童生徒が昨年の20%増えている。また、その他の記録会やスポーツ教室に児童生徒が参加している。 | ○反省アンケートに基づく計画立案と児童生徒会による実行委員会の立ち上げを行う。 ○外部大会や記録会、スポーツ教室等への参加啓発活動を行う。 ○楽しみながら運動を継続することができる運動カード(ex:マラソン、水泳、縄跳び)を作成する。 | ○令和6年度の体験型スポーツフェスティバルの基本計画を作成し全体に提案した。児童生徒会による実行委員会を立ち上げ、開閉会式、全体種目等の検討を開始している。 ○全国特別支援学校オンライン記録会に8名、全国障害者スポーツ大会バスケットボール競技中国四国ブロック予選会鳥取県選手選考会に1名参加した。 ○マラソンカードに続き縄跳びカードを作成した。中学部体力づくりで使用している。 | ○スポーツフェスティバルの基本計画を具体化し、各学部や分掌で計画、準備等を進めていく。 ○今後も引き続き外部大会や記録会等への参加啓発活動を行う。障がい者スポーツ大会については、今年度中から啓発活動を開始する。 ○各種運動カードを使った実践例を発信する。 |
| 表現活動推進部 | 表現力向上 | ○表現力向上の推進、教科の拡大 | ○表現活動を音楽や表現活動(高)だけで進めていくのではなく、様々な場面で表現力を向上できるような学習活動を組んでいく必要がある。 | ○児童生徒が自分なりに、表現する力を高めようとする場を数多く設定している。 | ○児童生徒一人一人の表現する方法や内に秘めているものを見つけ、その力を引き出し相手に伝えることができる学習活動を設定する。 ○表現することについて、校内研修会を持ち、各学部の実践の情報交換をする。 | ○ミュージカルやがいな祭への参加、各学部独自の発表会等、児童生徒の活躍の場が設定された。 ○研修に替え、各学部の祭の取り組みを見る機会を持つという形で実践の情報交換をすることができた。 | ○児童生徒の表現の機会を一覧にして、今年度の取り組みを明らかにして指導の充実を図る。 |
| | | ○自己表現できる場としての「けんべい祭」を設定 | ○けんべい祭では、児童生徒が学習の積み重ねを生き生きと発表している。(80%) | ○けんべい祭のねらいや取り組みの視点を明確にする。 ○表現力向上のために授業を見合う会等を設定する。 | ○全校で手話ダンスに挑戦したり、各学部で児童生徒一人一人の力が発揮できる発表内容に取り組んだ。保護者アンケートでは、児童生徒の様子を「一人一人が輝いていた」「一生懸命な姿」「自信を感じた」「生き生きとした姿」であったと評価をいただいた。 | ○今年度の発表を踏まえ、来年度に向け各学部の改善点等を出していただいた。各分掌の取り組み、反省とともに来年度に引き継いでいく。 | |
| 事務部 | 業務改善の推進 | 作成文書の見直し | 起案文書の関連審査に手間取り、文書施行までに相当の期間を要してしまう。 | スムーズな文書施行(起案文書のルール化)ができています。 | 校内研修(文書管理規定の理解と起案文書の作成ルール等)や年度初めの全体オリエンテーションのあり方を模索する。 | ①公文書作成マニュアル作成・見直しをはかり、校内情報共有サイトへ掲載した。 ②夏季休業中、教職員向け校内研修を実施した。 ③基本ルールについて再度徹底をはかった。 ※改善されてきてはいるものの、依然ケアレスミスは存在するため、これらをいかに無くすかが課題である。今後も継続実施する必要がある。 | ○公文書作成マニュアルを見直しし、よりわかりやすいものとする。 ○年度末人事異動を踏まえ、年度当初に文書研修を実施する。 ○夏季休業中にも校内研修を実施する。 ○合議のやり方を工夫するなどよりスムーズな文書施行を目指す。 ○研修についてのアンケート等を実施しより理解が深まるよう取り組む。 |

評価基準 A: 十分達成 [100%] B: 概ね達成 [80%程度] C: 変化の兆し [60%程度] D: まだ不十分 [40%程度] E: 目標・方策の見直し [30%以下]